

越前府中龍門寺の草創について 付 妙法寺の草創期の仏源派の展開

池田 正男

はじめに

越前府中（武生）の龍門寺は天正元年の織田信長の朝倉攻めの際に本陣を構えたと古伝にあり、その名残りとして南面には堀跡も残っている。この龍門寺の草創期あるいは城郭化した時期について追及してみたいと思う。

なお、この問題を追及するに当たり、妙法寺草創期の仏源派の展開は重要なファクターであり、未読の史料により新事実が判明したので前稿¹⁾を補う意味合いもあるので付記しておく。

一、幻雲文集の記事

『幻雲文集』の「悦岩栢公座元寿像」²⁾に龍

門寺の草創に関する記事がある。

悦岩栢公座元寿像

悦岩栢座元、初居越之少林山妙法寺、々々会羅兵燬、然後置回春院於国之府中、今之相公避乱、久寓此院、遂揮台翰、書龍門字賜公、因改回春為龍門也、頃興妙法、以復舊觀、加之佛慮僧房起廢居多、實法之檀度也、（後略）
以上の記事から以下のが判る。

① 妙法寺は応仁の乱で焼失した。³⁾

② 妙法寺の座元であった悦岩□栢が府中に回春院を建立し、そこに住した。

③ 悦岩は松源派末葉に属し、当時はこの派は振るわなかった。

④ 今の相公は乱を避け回春院に遇居した。

⑤ 今の相公が龍門なる書を遣わした。これによって回春院を龍門寺と改めた。

『幻雲文集』は月舟寿桂の手になるもので、とりわけ「幻雲北征文集」の「賛辞」の項に「悦岩栢公座元寿像」があり、月舟が越前に来た永正六年六月から同十五年九月までの間に記されたものが収められている。この間の将軍は足利義植（義材・義尹）であるから、前出の「今の相公」とは義植のことと考えられる。

二、龍門寺草創記事の検証

前出の記事によれば「義植が龍門寺の前身たる回春院に住し、後に義植がその寺院を龍門寺に改めさせた」と云うことになるが、その妥当性を検証してみたいと思う。

まず『大日本史料』を義植で検索し、関係事項を年表に記してみた。なお便宜のため、関連事項も当年表に付加しておく。（巻末参照）

・義植は越前回春院に亡命したか

「今の相公、乱を避け回春院に久しく遇居した」の記事について検討する。年表でみるに義植が越前に退避した可能性は、

① 義植の父義視とともに美濃に亡命した文明九年十一月から美濃より帰京した延徳元年四月までの間

② 義植が細川政元に敗れた明応二年四月から義植が越前府中より兵を敦賀に進めた明応八年までの間

以上の二つの期間が考えられる。

しかし後者は義植が越中の神保氏と越前朝倉氏によって身柄を守られた期間であるか

ら、「乱を避け…」の文言には合致しない。一方、前者の期間は「乱を避け」の記述からみれば美濃における文明の乱を指しているように思う。また、後述するが寺号に改めたのは明応二年（一四九三）以前とみられ、後者は成立しない。以上により義種が越前府中に来住した期間は、斎藤妙椿が死去し美濃で文明の乱が勃発した文明十二年二月から義種が美濃で元服する長享元年一月までの間の可能性が高い。

ここに越前府中に来住したことを想起させる記事がある。『蔭涼軒日録』の延徳二年閏八月六日から十日の記事を挙げておこう。⁴

六日、相公曾在濃州、其所号承隆寺、其房主夷中僧極貧僧也、御在国間致忠節之故、十利公帖可有御免如何、

九日、濃州龍門寺敬教首座、京城安国寺敬教西堂、如此書之、龍門寺事者、愚塔頭末寺之故書之云々、

十日、敬教首座甲利十利御判白之、（中略）敬教首座代南禅東禅院居住僧訓首座以葉室公命来、可請取之云、愚面之相問曰、教首座者何派、云、仏源派建仁五葉庵永源院一派也、

教首座雅号如何、祖庭、々々居所号大源院、是亦自公方賜此号我者承隆寺僧也、雖然依廷麟和尚為同宿也、

以上の記事から次のことが判る。

- ①義種が美濃に亡命中に大変世話になったとして美濃承隆寺に諸山位を飛び越して十利位を与えようとし、加えてその住持職を敬教首座（敬教祖庭）に与えようと強要した。
- ②美濃承隆寺は仏源派建仁寺五葉庵永源院に従属する。
- ③その房主は極貧の僧である。

（なお美濃龍門寺については蔭涼軒主の配慮によるもので、越前龍門寺とは無関係である。）

以上、美濃承隆寺が義種的美濃亡命に力を貸したことが判明した。そしてその承隆寺は仏源派の建仁寺五葉庵と永源院に属していたことから、龍門寺悦岩とのパイプが存在したかどうかを探ってみる。

まず悦岩の所属する法系について検討してみる。

前出のように悦岩は松源派末派に属している。松源派は日本では概ね大覚派（蘭溪道隆）と仏源派（大休正念）と法海派（無象静照）

及び古林系の四派があり、妙法寺には大覚派と法海派及び古林系の痕跡が無い点からみても悦岩が仏源派であったと考えられる。加えて「悦岩栢公座元寿像」に「甘党之蔭足慰禅叢凋落、旧業已隨征戰蓋、少林之暮復觀祖塔巍然」

また常庵龍崇の『寅闇疏』⁵には「春和住妙法并序、本寺迺石翁老祖挿草靈場、而追崇先仏源為開山第一世矣」とあって、後者の史料によって前者を補足して読めば、「妙法寺は戦禍に遭って栄えていた頃の面影は見るべくもなく荒廃してしまったが、復興して祖塔も旧觀を取り戻しているとし、かろうじて悦岩をして仏源の法燈と祖塔を守ってきた」とある。

さらに後述する（三、妙法寺草創期の仏源派の展開について）が『傑翁録』から見出した史料により、越前での南北朝の戦いが終息した後に、妙法寺への仏源派の登住記事が散見されることから、当時の史料によって仏源派が隆盛だったことを証することができる。

以上、悦岩の属性を示す直接的な資料は提示出来ないが、高い確率で悦岩が仏源派に属

していたと推定できる。

次いで美濃承隆寺と龍門寺悦岩を結ぶパイプを探ってみたいと思う。まず仏源派の展開を概観すれば次の通りとなる。なお当稿末に法系図を掲げておくので参照されたい。

- ①大休の円覚寺蔵六庵
- ②大川流の円覚寺臥龍庵・宝亀庵
- ③東峰流の円覚寺利濟庵
- ④鉄庵流の建仁寺瑞応庵・永源院
- ⑤秋澗流の円覚寺帰源庵・大慶寺方外庵
- ⑥嶮崖流の円覚寺天池庵・寿福寺悟本庵・建仁寺五葉庵

ところが妙法寺の石翁属する日山流は本拠ともなる塔頭を有しておらず、『傑翁録』の記述を按ずるに早くから大慶寺方外庵に拠っていたと推測される。ところが前掲の展開をみて明らかのように秋澗流は京都方面への進出が認められない。仏源派では京都への展開は鉄庵流の建仁寺瑞応庵永源院と嶮崖流の建仁寺五葉庵のみに限られている。

以上のことから政治の中心が鎌倉から京都にシフトする中で止む無く鉄庵流もしくは嶮崖流に頼らざるを得ない状況に至ったものと

推察される。一方、美濃承隆寺の法系は不明であるが、『蔭涼軒日録』の記事により、五葉庵と永源院下と記されており、美濃承隆寺と越前龍門寺の前身となる回春院悦岩とのパイプはそこを介したものと推定する。とすれば義種が美濃に亡命していた頃に美濃斎藤氏の内紛が勃発し、その亡命先を美濃承隆寺の敬教首座が同派に属する越前の悦岩座元に依頼し、悦岩住する回春院のもとに送り込んでいたと推察できる。

また、その亡命生活は極貧の僧房に拠っていたとみられ不安定な状況にあったことが推察される。

そうした状況を踏まえて按ずるに、義種が越前に逃れて来たと考えられる期間は十一から二十一歳頃とみられ、目立たない童僧として、ひっそりと匿われていたものと推察される。

なお美濃承隆寺は義種が死去した後の天文五年四月に漸く諸山位を得たにすぎない。なお『鹿苑日録』や『鹿苑院公文帳』には文亀三年に承隆寺へ月江寿訓の入院が記されている。またその所在地は不明である。

・回春院を龍門寺に改めたのは何時頃か

次いで「相公が龍門の書を遣わした」件について検討する。

「幻雲詩稿第二」に「次龍門仙遊少年試毫⁷」がある。「・・詩稿第二」は長享元年から明応九年の作が収められているが、とりわけ「次龍門・・」は明応元年（壬子）の作と明応二年（癸丑）の作の間に収められていることから、少なくとも明応二年（一四九三）には寺号が龍門寺になっていたことが判る。よって前出の年表により、美濃承隆寺への厚遇とほぼ同時期であったように推察される。

なお、越前龍門寺への恩賞は美濃承隆寺に比べ見劣りするのは何故であろうか。朝倉氏は当初には西軍に属し、義視・義植属する東軍と敵対しており、朝倉が寝返って義植方の味方になった訳で、義植からみて心から信頼できる相手とは考えていなかったと考えられる。また、亡命中の待遇もさほど好印象を持ってなかったであろうことが推察される。さらに朝倉氏からの要請も無かったこともその理由に挙げられる。

なお、『幻雲北征文集』の「銘」の項に「走

筆銘于回春院為先妣芳隣頓書終末⁸⁾が収められている。この作の一つおいて次の作に「予今発越赴洛」の文言があり、この作者月舟が越前から京に向かうのは永正六年(一五〇九)であるから「走筆銘于回春院・・」は永正六年頃の作とみられる。しからば寺号を改めた時期はどうみるべきか。①明応二年に寺号改めるは誤りで、更に遅い永正六年以降の時期である。②龍門寺内の塔頭として回春院は存続した。以上のどちらかと考えられる。

(幻雲北征文集に収められる点からみて、この回春院は北陸地域所在寺院とみられる。)

なお『驅雪臺』には「越府之龍門建公座元、云々⁹⁾」とある。ただしこの記事の成立時期の手掛かりは掴めない。ただし驅雪の示寂は永禄元年(一五五八)であるからその成立は永禄元年以前であったことは明白となる。筆者は明応初年までに寺号を龍門寺に改めたものと考え、反証資料については今後の課題としておく。

・龍門寺整備の財源はどこから出たか。(夢窓派について)

ここで龍門寺を整備した財源はどこから出

たのかを検討したいと思う。仏源派はこの頃衰退期にあり、独力で整備の財源を工面したとは考えられない。また朝倉氏とのパイプも見えてこないのである。視点を変えて検討してみたいと思う。

『扶桑五山記』によれば妙法寺の開山は無学祖元・高峰顕日・夢窓疎石¹⁾の三祖師を挙げるが、実質は夢窓が勧請開山に据えられている。前にも記したが『幻雲稿』などでは大休正念が妙法寺の勧請開山に据えられていた。つまり妙法寺開山の据え替えが行われている。筆者は回春院を龍門寺に改められたことと、応仁の乱で焼失した妙法寺の再建はセツトでみるべきと考える。先に挙げた美濃承隆寺の官寺化では蔭涼軒主や夢窓派にその面倒をみさせている。開山の据え替えからみて妙法寺の再建にあたっては夢窓派が当たったとみている。越前国は朝倉氏が檀越となる弘祥寺と善応寺をして曹洞宗宏智派一色であったから、幕府側からみて朝倉氏の監視役・情報中継基地としての拠点作りが求められていたと考えられ、夢窓派にその役割をゆだねたものと推考する。

推定に至るには「悦岩栢公座元寿像」に「今之相公避乱、久寓此院、遂揮台翰、書龍門字賜公、因改回春為龍門也、頃興妙法、以復舊觀」とあり、妙法寺の復興が成りつつあることを記している。その時期については「悦岩寿像」が、月舟が越前に来た永正六年六月から同十五年九月までの間に記されたものであることと、月舟の著作に妙法寺への夢窓派の登住する記事が無いことを鑑みての推定である。月舟の著作に夢窓派に関する記事が無いことは、妙法寺から龍門寺の分立と妙法寺への夢窓派の展開がリンクしているとする論拠の弱点ともなるが、それは月舟の朝倉氏への遠慮が働いたことを勘案しなければならぬ¹⁰⁾。因みに応仁の乱後の妙法寺への登住の記事を挙げてみる。

- ①永正四年(一五〇七) 仙甫寿登 幻住派 (幻雲稿)
 - ②永正十一年(一五一二) 春和啓闡 一山派 (寅闇疏)
 - ③天文十九年(一五五〇) 龍岳周劉 夢窓派 (東山歴代)
- ①の仙甫の法眷疏では「遇居寺傍」とあつ

てこの時期には再建されていない。

②の春和は一山派つまり蔭涼軒主の属する派であり、蔭涼軒が手を延してきたと考えられる。

③の龍岳は夢窓下の龍湫周沢の法系につながる人であり、夢窓派が占拠したともみられる。

また後の天文二十三年には日円寺は妙法寺と十刹位を争うほど寺勢が増した。この日円寺もまた夢窓派が浸潤していたことをみても妥当な見解と考える。

一方、永徳寺の場合は「開山大休正念・中興開山此山妙在」となっており、開山の据え替えがなされた妙法寺とは対照的である。如何に勢力を誇った夢窓派と雖も、このように世間に顔向けできないような暴挙をしたのか、筆者はかねがね疑問を持っていた。推考するに龍門寺を仏源派の悦岩をして仏源派の拠所とした訳であり、恐らく妙法寺にあった仏源派の祖塔を龍門寺に移すことを条件として龍門寺を仏源派の度弟院として供与し、妙法寺の開山を夢窓とすることに同意させたのではないかと思えてならない。

なお『一乗録』には「小泉秀之、称四郎右衛門尉、妙法寺村人、又有新七郎者」¹¹とある。

小泉氏は朝倉氏の年寄衆に属し、一乗谷奉行を務め、斯波氏の被官から朝倉氏に転じた氏族であつて、小泉四郎右衛門尉はその傍系とみられる¹²。よつて朝倉氏は夢窓派の拠点たる妙法寺の監視役として小泉氏を配したように見受けられる。

また大永二年に龍門寺瑞安が越知山造営料を寄進しており、瑞の法諱からみて夢窓派の僧とみられる。よつて悦岩亡き後、夢窓派が龍門寺を差配し、越知山に造営料を寄進するほど寺勢が増し、寺基の拡大も図られたものと推察される。

余談ながら枯山水の鯉石として著名な龍門爆は、蘭溪道隆（大覚禪師）が中国の故事である登竜門、つまり鯉が死を賭してまで龍になるべく努力する様に擬えて、禅で悟りを得る覚悟を重ね合わせて説いたことに由来するという。このことを夢窓疎石が禅院の庭に禅の教えとして意匠したという。

この故事を義植が認識していたものと考えられることから、恐らくこの龍門寺には枯山

水庭園が造営されていたものと推考する。ただし龍門の寺号は夢窓派の専一のものではないが、夢窓の開山である天童寺の境致に龍門亭と天下龍門（外門・法界門）があり、夢窓との関わりが深い点を付記しておく。

以上、府中龍門寺の寺号は義植から受けたものではあるが、「龍門」は夢窓派が重用する号である点、大永二年には夢窓派ともみられる瑞安が龍門寺住持となっている点などからみて、府中龍門寺整備の財源は妙法寺再建とリンクして、夢窓派が担ったものと推察する。

・龍門寺が城郭化した時期は何時頃か

次いで龍門寺が城郭化した時期について検討してみる。『朝倉系図』に「越前国主朝倉義景家臣所謂、(中略)龍門寺典膳」¹³とあり、朝倉氏時代末には龍門寺は朝倉家の家臣となつているから、龍門寺は武家館程度までには構えが強化されていたものと推察される。

次に『応仁記』¹⁴に龍門寺が出現する記事を挙げてみる。

永祿十年十一月二十一日、新公方(義昭)午刻バカリ二回国府中ノ庄二着カセ給ヒ龍門寺

ト云フ禅院工入ラセマシマシ（後略）

『信長記』には

天正元年八月十八日、府中龍門寺に至つて御様を居えせられ（後略）

天正三年八月十四日、府中の内龍門寺拵へ、三宅権丞これあり（後略）

天正三年八月十五日、夜に入り府中龍門寺、三宅権丞桶籠り候構へ忍び入り乗つ取り、近辺に放火後、（後略）

天正三年八月十六日、信長、敦賀を御立ちなされ（中略）府中龍門寺三宅権丞の構へまで御陣を寄せられる。

『朝倉始末記』も見ておこう。

信長公越前発向之事（中略）府中龍門寺ニハ三宅権之丞、（後略）

天正三年八月十四日、府中迄責入り本陣龍門寺ニ寄来り（後略）

天正三年八月十七日、府中龍門寺ニ御本陣ヲ居サセ給ケル（後略）

以上の通り『応仁記』、『信長記』、『朝倉始末記』とも龍門寺を城とはみなしていない。ただ一向一揆の三宅権之丞が補強したことが窺える。

次に府中城もみておこう。

天正十一年四月二十一日、利家府中城へ御桶籠被成候¹⁷

とあって、大方の史料は柴田氏側にあった前田氏は戦場の北近江から居城となる越前府中城へ逃げ帰ったとしており、龍門寺は登場しない。文献によっては前田氏が龍門寺城に入ったとする記述を見かけるが根拠は不明である。

一方、『越前国古城跡并館屋敷蹟』¹⁸には

一 龍門寺城跡、富田弥六郎長秀、一揆三宅権之丞、不破河内守、当地今龍門寺々地

この著は別称『越前国城跡考』とも呼ばれ、享保年間成立であり、特に補足記事は信頼できない。この著の反証史料として『越路草』には

「今立郡十万石ヲ信長ヨリ前田、不破、佐々三人ニ分チ賜、前田又佐衛門ハ府中、不破彦三八五ケノ内、佐々内蔵助ハ五分一居住ノ由云伝へ、今二屋敷迹有、一説佐々ハ府中龍門寺、不破ハ同処惣安寺居住ノ由ナリ」との異説もある¹⁹。

以上、記した通り「龍門寺城」と記す史料

は『城跡考』のみである。また府中三人衆の内の前田利家の府中城と佐々成政の小丸城については問題ないとみる。しかし不破光治の龍門寺については確たる文献を見付けられなかった。しかし、いずれであっても小丸城が天正三年の一向一揆壊滅後から天正一一年の柴田勝家敗戦までの間に築城が進行した経緯を鑑みて、この間に龍門寺の城郭化も進行したことを推定するものである。

よって当稿では少なくとも天正三年までは「龍門寺」と表記し、「龍門寺」を防御機能のある館跡と捉えることとする。

いずれにしても当地の発掘調査が待たれる。

三、妙法寺草創期の仏源派の展開について

妙法寺に仏源派の法系が進出してきたのは何時頃であるかを探ってみたいと思う。年表にも載せておいたが、妙法寺への禅宗の導入は永平派の寂円によるものであった。次いで仏源（大休正念）が開山に請じられているが、それは妙法寺の長老が秋洞道泉住する鎌倉十刹の大慶寺で上堂を遂げたことによるものと

¹⁷若越郷土研究（福井県郷土誌懇談会）

考えられる。また常庵龍崇の『寅闇疏』²⁰には「春和住妙法并序、本寺廻石翁老祖挿草靈場、而追崇先仏源為開山第一世矣、翁之后渚子孫胥踵住持、為乏矣」とあって石翁が妙法寺の草創と記し、石翁の子孫が妙法寺を嗣いでいると記している。

また仏源派秋澗下の傑翁是英の『傑翁録』には「妙法堅公石翁禾上入方外祖堂」²¹に「延文辛丑三月念七」とあり延文六年（一二六〇）三月に方外庵に祀られた。『寅闇疏』では石翁を妙法寺の草創としていことからみて、この石翁によって妙法寺への本格的仏源派の展開がなされたとみる。『五山禅林宗派図』²²によれば、この石翁の法系は大休―日山玄慧―行山―怒堂―石翁是堅となっている。また石翁の子孫が妙法寺を嗣いでいるとあることからみて、先の龍門寺悦若は石翁の子孫である可能性が高いとみている。

また『傑翁録』には「山門勸請妙法西堂別岸和尚住大慶」²³があつて、別岸和尚（大休―秋澗―別岸）が妙法寺入院、大慶寺入院の後、応安二年七月に示寂している。なお妙法西堂とあることから、この頃までに妙法寺は諸山

位を得ているとみられる。また石翁と別岸は共に大慶寺の塔頭方外庵の祖堂に祀られた。この方外庵は秋澗和尚の興した塔頭であり、石翁は日山下であるにも拘らず、方外庵に祀られたことから日山系は秋澗系に合併統合されたものと推察される。

『秋澗録』には「日山和尚大慶寺祖堂」²⁴があるから、日山は法兄の秋澗より先に示寂した訳であり、比較的短命だったのかもしれない。このことは日山系が弱体化した理由だったようだ。そして日山は大慶寺に祀られていたことが判る。同録には「祭日山和尚文」²⁵もあり、両記事は唯一の日山の消息であるが、妙法寺に関する記述は見当たらない。よつて日山と妙法寺との接触はなかつたものと推測される。ちなみに方外庵は戦前まで存続していたが、昭和一九年になって大慶寺が再建されないので、方外庵が大慶寺を称し今日に至っている。

さらに「贈兼深二禅人帰北越郷省妙法老師」²⁶とあつて延文二年正月に妙法寺の老僧が鎌倉より帰国している。この二禅人は兼兄（法兄）と深弟（法弟）とあることから、秋澗下の傑翁と同門ともみられ、日山系のみならず

秋澗系も妙法寺に住していたとみられる。以上のことからみてこの頃は妙法寺と鎌倉の仏源派とは密接に結びついていたことが知られる。

ちなみに『傑翁録』には永徳寺に関する記事がみられない。恐らく康安二年に越前安国寺長樂寺を廃し永徳寺が指定され、この頃から此山派が永徳寺へ進出してきたことと連動する事象と考えられる。つまり永徳寺の支配権が仏源派から此山派に移つたものとみられる。

ここで妙法寺への仏源派展開の立役者は誰であったのかを探つてみたいと思う。

A 大慶寺蔵木造釈迦如来坐像の体内銘、²⁷相州小坂郡深沢郷須崎村靈松山大慶禅寺者本願檀那長井光禄大夫覚華院殿威峰厳公大禅定門建立而拜請仏源大禅師以為開山初祖也²⁸

なお、「長井光禄大夫覚華院殿威峰厳公大禅定門」に該当する人物を特定しようとしたが、特定に至っていない。因みに『秋澗録』に「覚華院殿請云々」²⁹とあつて生存者として記事が載せられている。大慶寺の檀越は長井氏であることは判明したが、この大慶寺の開山は大休正念であるから、秋澗のパトロンも

長井氏かどうかをみてみる必要がある。

B 妙法寺の檀越を掴むべく最も重要な手掛かりを有している史料と云えば『秋澗録』³⁰に「中穂上堂（中略）謝小松宝蘊長老、越州妙法長老至上堂、靈松之翠、小松之風、（後略）」

『秋澗録』では複数の上堂者がある場合の記述をみるに①同一の寺院の僧である場合、

②新旧両班上堂の場合、以上の二例がみられる。ところが前出の場合には「小松宝蘊長老」と「越州妙法長老」とが列記されており、両

寺が何か繋がりががある故の記述とみる。また小松は地名で、宝蘊³¹は寺号とみる。ただし

「小松宝蘊」が先に記され、「越州妙法」がその後記されているので、「小松宝蘊」は越州では無いとみえる。残念ながら現時点ではそれ以上の手掛かりを掴めない。

C 次いで手掛かりを探れば「山門勸請妙法西堂別岸和尚住大慶」の末尾に「而称深東羽檀度福海」とあって、出羽の福海なる人物が別岸和尚のパトロンであったらしい。

因みに「為別岸和尚拈香」には「遠往大唐参禅後、皈在扶桑利生時、居少林室、説妙法、陞大慶堂祝皇基」

「為前任大慶別岸和尚秉炬」に「孤錫遊徧百城南、片帆再皈扶桑東、少林妙訣靈山旨」とあって別岸は入唐し帰国後に妙法寺へ入っている。

D 秋澗のパトロンの手掛かりを掴むために、『秋澗録』³²にみる武家の登場人物を挙げると

①長井宗秀 ②長井貞秀 ③大江時干

④出羽安達時顕 ⑤工藤泰貞 ⑥工藤義貞

⑦合田遠貞 ⑧諏訪金刺盛久 ⑨小松右金吾

E 秋澗のもとで上堂を遂げた地方寺院名を抜き出してみる。

①出羽資福寺 2回、②出羽延徳寺 1回、③北城（出羽か）満福寺 1回、④（甲斐か）大福寺 3回、⑤越前永徳寺 1回、⑥越前妙法寺 1回

以上のように大福寺については不明ながら、秋澗の展開は出羽と越前に限られており、出羽では長井氏が有力なパトロンであったようだ。

なお、長井氏は鎌倉幕府の公文所別当大江広元の次男が始祖であり、出羽の長井荘を本拠と

したことから、長井氏を名乗り、承久の乱で大江氏が排斥されたため、長井氏が大江氏の総領となり鎌倉幕府の要職を担った。稿末に大江広元系の系図を挙げておく。

以上、長井氏は「秋澗」の有力檀越であったことは明白となった。しかし長井氏が越前妙法寺の展開に関わったかどうかは不明である。

少し視点を変えて越前妙法寺への仏源派展開を探ってみたいと思う。

南北朝期の戦いでは瓜生兄弟が妙法寺に陣所を置いているから、瓜生氏が檀越だったのではないだろうか。

瓜生氏の元姓は渡辺綱で著名な渡辺氏であり、大江氏の傍系の毛利氏の被官であったから、瓜生氏が大江系毛利氏を通じて仏源派に接近したことが推測される。以上の経緯を経て鎌倉末期に瓜生氏が仏源派の檀越であったと推定される。

後の時代の史料ではあるが、越前での長井氏大江氏の史料を挙げておく。

①小早川什書、御判³³ 越前国志都郡郷長井太郎知行（中略）明応四年七月二八日

②康永二年造内裏段銭引附に十貫文 長井因幡守殿越前国従都(部抜か)段銭・奉書案、甲斐美濃入道宛、斎藤藏人入道の給物なる徒部郷の年貢を長井入道の未進するを止め、重ねてこれを究済せしむ(古文書集2)

③応永八年三月十日付伊勢貞行・藤原某連署

④若狭長井文書「領知方、河合庄中角村、長畝郷河和田村、磯部羽崎村、春近田端村、都合參百石、(中略) 天正十三年六月二十三日、山田喜左衛門尉高宜、長井左京亮殿」

⑤越前の大江氏坂井郡にあり、名勝志に豊原寺は天台宗、白山衆徒の一也、堂舎中古頗破せるを天治年中、伊勢守大江通景の子以成、その母は利仁將軍の末裔、大夫為長の娘なりしを以て当国押領使と為り長畝大夫豊国が一跡を領知し、当寺を再興し庄園を寄進せしむ

⑤については、広元系ではない大江氏と斎藤氏とのつながりもあるようだ。③はその名残か。なお、武藏の長井荘に斎藤実盛が住した縁で、長井斎藤別当実盛と名乗っているが、出羽の長井との関わりではない。

次に越前における南北朝の戦いが終息し、瓜生氏が退転した以降、瓜生氏に代り仏源派をバックアップした氏族を推測してみたい。

この戦い後にも妙法寺への仏源派の展開がみられる。斯波高経の生母が長井時秀の娘であることに加え、妙法寺は越前守護所を取り巻く五山派寺院として発展した点からみても、斯波氏の強力な支援があったことを推測させる。因みに佐藤圭氏は「承久の乱後に但馬の朝倉庄に長井氏が新補地頭として入り、朝倉氏は長井頼重に従属するような関係になってしまった。そして朝倉氏が斯波氏に従って但馬から越前に入国してきた時、朝倉広景が高経の老臣となっているのは、恐らく高経の母方の長井氏との関係によるものと推測される。」と記している。

最後に仏源派と越前関係者との文芸活動をみておく。

『東山諸派古徳像賛仏事二』³⁹は鉄庵道生の著作であるが、「別源・月篷両師題可休亭偈」や「月篷和尚贊」と「月篷序」が収められている。また鉄庵下の惟忠通怒は著名な詩文僧であって、その人の著「擊驢槓」には「和韻天境和尚開炉謝玉岡西堂至」と「寄弘祥東湖長老韻(弘祥者別源開基東湖嗣中岩)」とがある。月篷円見は別源の法弟であり、玉岡如金は別源の法嗣で、東湖淨暁は別源の朋友中畝円月の法嗣であり、いずれも著名な文筆僧であって、仏源派の鉄庵・惟忠ともども活発に交流があったと推測される。

なお「雨華岩」⁴¹とは妙法寺の塔頭の別号であるが、宏智派別源円旨の法弟となる不聞契聞の作『関東諸老遺藁』⁴³には「雨華岩還郷省師領序」に「鹿山東陵老人、其内記ム人還郷省師」とある。しかし玉村竹二氏は『五山文学新集』の「雨華岩」の脇付けに「法雨」を付けている。これが「法雨」つまり「仏の慈悲が衆生をあまねく救う」の意であるのか、「雨華岩」を「華岩法雨」の僧名とみているのか、判断に窮する。この雨華岩を僧名とも塔名(境致か)とも判断を付けかねている。

仮にこの「雨華岩」が塔名であるとすれば、その塔主は鎌倉文壇のメンバーであったようだ。この集は文和年間の作が収められており、僧名は不明ながら、宏智派の東陵門下の人ともみられることから、文和年間には妙法寺塔頭「雨華岩」は宏智派の東陵永興門下の拠所であった可能性を指摘しておく。

なお、残念ながら仏源派の現存する文集からは妙法寺関係者の記事を見出せなかった。

追補一 秋潤道泉の勅号について

勅号の法源禪師が二名あって、文献理解上で混乱を生じていた。つまり、仏源派の秋潤道泉と東福円爾派の無涯禪海である。特に秋潤については「大法源」と「法源」の二通りがあり、何故このようなことが生じたのかを考察してみたいと思う。『傑翁録』の「賛仏祖」の項には「大法源禪師 是仙鑑寺請（中略）円湛之子、仏海之孫、受囊中勅號大法源、宗門高立、方外乾坤」⁴⁵とあって秋潤に対する大法源の勅号を請じたとある。思うに法源禪師が二名おり、当時から紛らわしい問題があったので、大法源を再申請したものはあるま

いか。

また「住相州金宝山淨智禪寺語録」⁴⁶の江湖疏に「大法源」の文言が記されていることから、この入院である貞治二年十二月頃には勅号が下されたとも考えられる。

しかし『傑翁録』には秋潤のことを法源と記した傑翁述の記事は貞和四年の「為是宝禅門拈香」、延文三年の「妙法堅公石翁禾上方外相堂」、応安元年の「為是頂侍者下火」、応安八年の「為別岸和尚拈香」であり、貞治二年を過ぎた応安元年と八年にもあることから、秋潤下の傑翁がこのことに無知であったとは考えられず、勅許は応安八年（永和に改元）以降であったと推定される。

因に『諸宗勅号記』⁴⁷の「二代朝年紀甲子等不見号」や「闕文」の項に「法源」「大法源」の記載が無い。

追補二 越前への仏源派第一伝について

『五山禅林宗派図』によれば、仏源（大休）門下の秋潤、日山に次いで総覚が記されている。また『日本中世禅宗史』⁴⁸には典拠は不明ながら「総覚越州淨福寺住」と記され、『延

宝伝燈録』⁴⁹には「越前州淨福寺総覚禪師」と題し、伝記が記されている。

永徳寺や妙法寺への仏源派の展開は秋潤道泉を介したものであるから、いわば第二祖から法を嗣いだと云うことになる。「越前淨福寺」へは仏源の面授たる総覚によるものとなるため、永徳寺や妙法寺への展開以前に淨福寺へ展開していたことになり、宗教史上看過できない問題となる。少しこの「越前淨福寺」を追跡してみたいと思う。

『延宝伝燈録』には「越前州淨福寺総覚禪師、幼齡侍兀庵和尚于福山、又遊支那遍歴叢社、帰參仏源于建長、源俾看趙州狗子話、偶看大慧語、至不壞世間相而談スト云ニ実相、有人處、趨告仏源、源呵之曰、従門人者不是家珍、師礼拝而退、一日源上堂、拳狗子話曰、不得作有無会、但直下提箇無、遂高聲曰、無、師聞得豁然大悟、詣丈室呈所悟、源為之助喜付衣印記、擢居第一座、越州檀越創淨福寺以招之、四衆帰風立法幢」とある。

幼くして来日僧の建長寺兀庵に随侍し、後中国を遍歴し、帰国後建長寺仏源に帰参したとある。そして建長寺第一座に就いた後、越

州檀越の招きで越前淨福寺の開山となったとされているが、生国、生没を明らかにしていない。元庵は文永二年（一二六五）には中国に戻ってしまったので、これ以前に総覚は元庵に随侍していたことになる。そして仏源は正応二年（一二八九）には示寂してしまっているので、総覚が仏源に帰参したのはこれ以前であつたようだ。そして檀越が越前淨福寺を創建し、開山に請じたのはこの頃とみられる。となれば寂円が妙法寺に入る前に病を得て妙法寺へは入らなかつたとあるのは、寂円派の衰退を示唆しているように思われ、寂円示寂は正安元年（一二九九）であり、妙法寺長老が大慶寺で上堂を遂げたのは正和三年（一二三四）であつたことを鑑みて考察すれば、寂円示寂後衰退があつて、妙法寺を仏源派就中法源（秋潤）に手引きしたのは総覚であつた可能性が高いとみられる。永徳寺も同様のことがあつたと推察される。

なお『延宝伝燈録』は延宝六年（一六七八）に元師蜜により成立した。師蜜編の『本朝高僧伝』にも当記事が転載されている。この典拠を明らかにしたいと思つていたところ、

『念大休禅師語録』に「示覚總首座住淨福」^⑤があつて、「總覚」が「覚總首座」とひっくり返つてはいるが、これが底本であることが判明した。また「付淨福覚總長老法衣」と「為淨福覚總長老讚」もあつて、短文ながらこれも参照したとみられる。なお筆者は淨福寺所在地に関する情報に接していない。今後の課題としたい。

追補三 越前最勝寺・旭海祖果について

筆者は越前に建長寺末あるいは大覚派の法系は入っていないと思つていたが、『諸宗勅号記』^⑥に次の一文があるので、付記しておく。「正統朝宗禅師、建長寺末、諱祖杲字旭海、諡号、越前最勝寺、大覚禅師其子智覚、其子足庵、其子無礙、其子旭海云々、勅、旭日照臨式光烈東海外、巨利最勝久高尚北越間、祖杲和尚、大覚玄孫、無礙的嗣、（中略）諡曰正統朝宗禅師、明応八年八月二八日（後略）」とあつて、明応八年（一四九九）に建長寺末の最勝寺に大覚派五世孫となる旭海祖果がいて、正統朝宗禅師の諡名を求めていたことが判明した。

『五山禅僧宗派図』に
蘭溪道隆大覚―桑田道海―靈岩道昭―足庵祖麟―無礙―旭海祖果
とあるものの、「旭海」に関する伝記は見当たらない。

なお『蔭涼軒日録』永享八年（一四三七）三月十四日の条に鎌倉五山福福寺への座公文を得た人物として「祖杲西堂」が挙げられている。この人物が同一人とすれば、越前最勝寺は退居寺院であつたとみられる。

この最勝寺の所在地及び旭海和尚の探索は今後の課題としたい。

おわりに

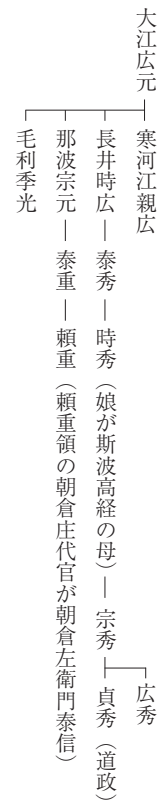
個人的なことで恐縮であるが、これまで五山派にしか眼が及ばなかつた。それ故、特に総持寺系について疎かつた。こうした折に『日本洞上伝燈録』なる和綴本を入手したので機に、越前での総持寺系の法系を書き出してみた。その中に龍門寺が無いことに気付いたが、そこで漸く龍門寺は妙法寺から派生した寺であつたことをすっかり忘れ去つていたことを認識した次第である。そのような訳で

急ぎ当テーマに着手した。

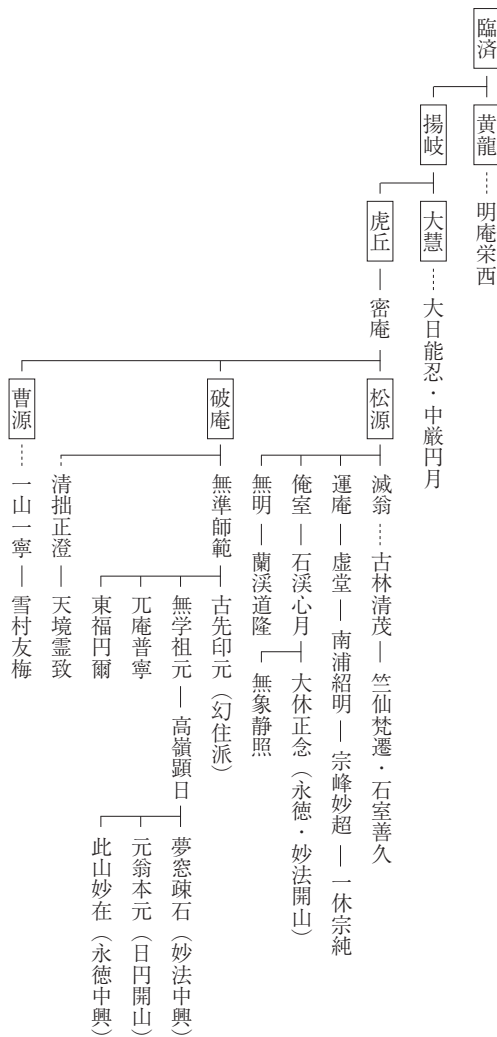
ところで今日の研究環境はすこぶる進展した。例えば東大史料編纂所の『大日本史料』の検索や閲覧、あるいは所蔵史料の公開データベースなどは大いに研究環境の利便性に寄与している。その恩恵を受けて、着手してから二ヶ月ほどで論考の骨子が固まるほどに快速で進行した。

なお、妙法寺の仏源派の展開については不明な点が多かったのであるが、前稿⁵³を補う未読の史料を見出した。当テーマにも関連する史料でもあることから、妙法寺の草創期についても記した次第である。

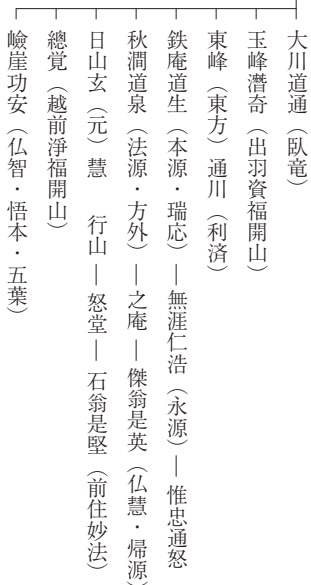
長井氏系図



法系図



石溪 (仏海) — 大休正念 (仏源・藏六)



・年表

寛元元年(一二四三)七月	道元、越前へ下向	応安二年(一三六九)以前	妙法寺諸山位を得る
建長五年(一二五三)八月	道元示寂	文安四年(一四四七)以前	妙法寺へ怡庵和尚入院
弘長元年(一二六一)	蘭溪道隆、建長寺退院し、兀庵普寧、建長寺入院	文正元年(一四六六)七月	足利義材生誕
文永二年(一二六五)	兀庵普寧、中国へ帰国	応仁元年(一四六七)一月	応仁の乱始まる
文永二年(一二六五)以前	総覚、建長寺で兀庵に随侍	応仁二年(一四六八)五月	義敏、義廉、朝倉勢を越前より追落
文永一〇年(一二七三)以前	義準(義能)真言宗永徳院を開創	応仁二年(一四六八)この頃	朝倉孝景越前に帰国
文永一〇年(一二七三)十二月	真言宗意教上人頼賢、永徳寺で示寂	文明三年(一四七一)五月	妙法寺焼失
文永一〇年(一二七三)この年	義準、越前永徳寺に頼賢を請じて説法	文明三年(一四七一)八月	朝倉、東軍に寝返り、甲斐孤立
弘安七年(一二八四)	安達盛宗越前国司に任じる	文明四年(一四七二)八月	朝倉、鯖江上野・新庄保鴨宮で甲斐と戦闘
正応二年(一二八九)十一月	大休正念示寂	文明六年(一四七四)一月	朝倉、府中守護所より甲斐氏を追落
正応二年(一二八九)以前	総覚、帰国し、建長寺で大休に帰参、後に第一座となる	文明七年(一四七五)十二月	甲斐、反撃し杣山で合戦
正応二年(一二八九)この頃	総覚、越前浄福寺を創建し、開山となる	文明九年(一四七七)十一月	朝倉、大野で合戦甲斐・二宮・義敏を追落
正安元年(一二九九)以前	寂円妙法寺の開山となる	この頃	義視・義材美濃へ下る(義材十一歳)
正安元年(一二九九)九月	寂円示寂	この頃	悦岩□栢座元、回春院を建立(悦岩栢公座元寿像)
延慶四年(一三一)二月	永徳寺長老と庵主が大慶寺で上堂を遂る	この頃	斎藤妙椿死去、美濃文明の乱勃発(義材十四歳)
正和三年(一三一四)八月	妙法寺長老が大慶寺で上堂を遂る	この頃	妙法寺再建される(悦岩栢公座元寿像)
元享三年(一三三三)七月	秋潤道泉示寂	長享元年(一四八七)一月	(現相公)義材乱を避け回春院に遇居(悦岩栢公座元寿像)
暦応三年(一三四〇)九月	妙法寺城山麓焼き討ち	延徳元年(一四八九)四月	義材、美濃で元服(義材二十一歳)
延文六年(一三六〇)三月	妙法寺前住石翁是堅示寂	十一月	義視・義材美濃より上京(義材二十三歳)
康安二年(一三六二)八月	越前安国寺長楽寺を廃し永徳寺を指定	延徳二年(一四九〇)七月	越前善応寺諸山位を得る
康安二年(一三六二)この頃	此山妙法をして永徳寺の中興開山	延徳二年(一四九〇)閏八月	足利義材、第十代將軍就く(義材二十四歳)
応安二年(一三六九)七月	妙法寺前住別岸和尚示寂	この頃	義材、美濃承隆寺住持恩に報い十刹とす
			龍門の書額を受け龍門寺に改める(悦岩栢公座元寿像)

延徳三年(四九一)三月	斯波義廉の子息栄棟喝食、後に鞍谷氏を嗣ぐ
延徳三年(四九一)八月	細川政元が越前府中に来る
明応二年(四九三)四月	義材、近江に出陣、朝倉征討対象となる
明応二年(四九三)六月	義材、細川政元と戦い捕る(義材二十七歳)
明応二年(四九三)八月	朝倉勢一万余細川方となつて義材を京に連戻る
明応二年(四九三)九月	義材、越中へ逃亡する
明応七年(四九八)八月	足利義材名を義尹と改める
明応七年(四九八)九月	義尹、越中より越前含蔵寺移る(義材三十二歳)
明応八年(四九九)七月	義尹、越前府中を發し敦賀に兵を進める
明応八年(四九九)十一月	義尹、越前敦賀を發し京に向け進攻
永正四年(五〇七)六月	義尹、近江で戦い河内に敗走し周防に居す
永正五年(五〇八)二月	細川政元暗殺される
永正五年(五〇八)六月	義澄、貞景に参洛を命じるが一向一揆の対応を理由として断る
永正五年(五〇八)六月	義尹、復位す(義尹四十二歳)
永正六年(五〇九)六月	月舟寿桂、越前弘祥寺入寺
永正一〇年(五一三)十一月	足利義尹、名を義種と改める
永正一五年(五一八)九月	月舟寿桂、越前善応寺入寺
この頃	月舟寿桂、幻雲文集著す
大永元年(五二一)三月	義種、細川高国の専横を憤慨し出奔
大永二年(五二二)七月	龍門寺瑞安、越知山造営料を寄進する
大永三年(五二三)四月	義種、阿波で死去(寿五十七歳)
天文五年(五三六)四月	美濃承隆寺諸山位を得る
天文二三年(一五五四)四月	妙法寺十刹位を得る

注

- (1) 室町期越前の五山派寺院について 拙著 若越郷土研究第四九巻二号 平成一七年一月発行
- (2) 幻雲文集 月舟寿桂述 続群書類従 第一三輯 文筆部 四〇二頁
- (3) 幻雲稿 月舟寿桂述 続群書類従 第一三輯 文筆部 一一二頁に「仙甫登公座元住越之妙法々眷疏 越之前州路少林山妙法禪寺、乃法源禪師挿草地、請仏源禪師為開山始祖也、応仁搶攘之後、寺罹兵燬、為瓦礫場、自爾寺産豪奪、」とある。
- (4) 蔭涼軒日録 巻四 一七九三〜一七九七頁
- (5) 寅闇疏 常庵龍崇述 山門疏部 春和住妙法并序 建仁寺両足院藏本の謄写本 東大史料編纂所藏影写本の複写本
- (6) 扶桑五山記、鎌倉五山記、東山塔頭略伝等より仏源派の塔頭を抽出した。
- (7) 幻雲詩稿第二 月舟寿桂述 続群書類従 第一三輯 文筆部 一九二頁
- (8) 幻雲文集 月舟寿桂述 続群書類従 第一三輯 文筆部 三五八頁
- (9) 驢雪藁 驢雪鷹瀟著 五山文学新集別巻2 二三四頁
- (10) 拙稿「中世禅宗寺院越前善応寺について」でも記したが、月舟は朝倉氏からかなりの支援を受けたため、朝倉氏に慮る記述をしている。具体的

には善応寺に関する多くの著述があるにも関わらず、その草創期の檀越には一切触れていない。こうした観点に立つてみれば、妙法寺への一山派や夢窓派のアプローチには気付いていてもあえて触れない可能性が高い。

- (11) 一乗録について 佐藤圭著 一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要二〇〇一 一六頁
- (12) 越前朝倉氏の研究 松原信之著 三三六頁
- (13) 越前朝倉氏関係年表 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館発行 一四四頁
- (14) 「悼韶陽侍者詩序」に「韶陽諱葩、越之前州府人、而龍門悅岩翁寧馨也、天資魁傑、不混群兒、翁為之鐘愛、不減膝上文度矣、十二歲之秋、觀光上國、寓東山一華軒、分仙甫兄之席、(中略)句餘公染此病、孟夏二十六日、溘然逝矣」とあって悦岩の息は京都で修行中に亡くなっており、恐らく悦岩の後継者がいなかったものと推測される。幻雲文集 月舟寿桂述 続群書類従 第一三輯 文筆部 三四〇頁
- (15) 朝倉系図 大日本史料 天正元年八月二〇日 条 二〇五頁
- (16) 続応仁後記卷第九「越前一乗谷入御ノ事同朝倉館御成事」
- (17) 魚津附馬廻組小川忠左衛門覚書 大日本史料 天正三年八月二二日条 三〇八頁

(18) 越前国古城跡并館屋敷蹟 越前若狭地誌叢書 上 一八八頁

(19) 小丸城跡考 笠嶋恰史著(私家版) 五頁 越路草は越前国名蹟考より引く

(20) 前掲(5)に同じ

(21) 傑翁録 傑翁是英述 小仏事部 東大史料編纂所の公開所蔵史料データベースによる

(22) 臨濟宗楊岐派仏源派 五山禅林宗派図 玉村竹二著 二〇〇二二頁

(23) 傑翁録 秉仏部

(24) 秋澗泉和尚語録 中 秋澗道泉著 五山文学新集 第六卷 六三頁

(25) 秋澗泉和尚語録 中 秋澗道泉著 五山文学新集 第六卷 九〇頁

(26) 傑翁録 偈頌部

(27) 大慶寺藏木造釈迦如来坐像の体内銘 鎌倉の在銘彫刻Ⅱ 鎌倉国宝館発行 三三頁

(28) この墨書銘の紀年は永祿十年(一五六七)であり、信憑性に難があったが、『傑翁録』の「山門勸請妙法西堂別岸和尚住大慶」に「祖翁開山、湛古鏡於天池之正派、雄公創寺、薰龍鼻於覺華之德馨(後略)」とあるから、大慶寺の開基檀越が「覚華院殿」であることが証される。

(29) 秋澗泉和尚語録 中 秋澗道泉著 五山文学新集 第六卷 七三頁

(30) 秋澗泉和尚語録 中 秋澗道泉著 五山文学新集 第六卷 二二頁

(31) 蘊(うん)の字は竺仙梵僊(元徳元年(一二三九)の渡来僧)の徒弟に用いる法諱の系字に好んで用いられている。(平林寺史四七頁・五二頁)しかし宝蘊の記事は正和三年(一一三四)であるから、竺仙の渡来以前のこと故、竺仙との関わりは否定できる。ただし大休と竺仙は共に松源派であるから、蘊の字が好んで用いられる土壤があったのかも知れない。因みに「蘊」は(skandha)サンスクリットの漢訳であり、集まりの意味である。五蘊とは人間の肉体と精神を五つの集まりに分けて示したものである。この五蘊が集合して仮設されたものが人間であるとして、五蘊仮和合(ごうんけわごう)と説く。これによって五蘊(Ⅱ人間)の無我を表そうとした。

(32) 秋澗泉和尚語録 上 中 秋澗道泉著 五山文学新集 第六卷 五九三頁

(33) 小早川什書 史料綜覧 明応二年六月二八日 条 五四頁 東大史料編纂所公開データベース

(34) 姓氏家系大辞典第三卷 太田亮著 長井氏 四一二頁

(35) 足利一門守護発展史の研究 小川信著 七二五頁

(36) 若狭長井文書 大日本史料 天正一三年六月

- 二〇日条 一七八頁
- (37) 姓氏家系大辞典第一巻 太田亮著 大江氏
一一〇四頁
- (38) 朝倉氏の越前支配と中河 佐藤圭著 二五〇
頁 中河地区史 二〇一〇発行
- (39) 東山諸派古徳像贊伝事二 鉄庵道生著 建仁
寺兩足院原蔵 東大史料編纂所蔵影写本
- (40) 擊驢楸 惟忠通怒著 五山文学新集別巻二
六二五頁・六三二頁
- (41) 『驢雪粟』には「少林之雨華岩主南栄老禪、予
法門昆弟也、(中略)予一日訪老禪於雨華岩、茶
話之頃、一雨颯然、其岩之滴而碧者、可愛焉、於
是求予題一章、予云、東山月舟老人、曾起於一華
所開之地、而入斯四華所雨之岩、以顔焉、以願焉、
(後略)」とあって、宏智派の驢雪の法弟の南栄が
「雨華岩」の塔主となつており、かつては幻住派
の月舟の一華軒の故地としており、その地はいく
らかの変遷があつたらしい。
- (42) 関東諸老遺稿考 日本禪宗史論集下之一 玉
村竹二著 三二九頁
- (43) 関東諸老遺稿 不聞契聞著 五山文学新集別
巻二 一〇三頁
- (44) 「雨華岩」は恐らく妙法寺の境致の内の一つで
あつたとみている。その理由として①雨華岩は宗
教的命名であること。春屋妙葩は宝幢寺で「感雨
華之瑞」と奇瑞体験を記している。(延宝伝燈録)
また「空華集」にも「送雨華巖遊関寺 空華影伴
雨華巖」とある。(五山文学全集第二巻 一二四頁)
②妙法寺の立地は山裾にあつて、岩肌が露出して
いる箇所もある。とりわけその辺りは越前市域で
最も白山の眺望が勝れている地であること。③前
出の「雨華岩還郷省師頌序」には国名・地名・山号・
寺号が盛り込まれていない。雨華岩が境致であつた
からこそ、そうした説明が要らない名勝地であつた
からと考えられること。④作者の不聞は宏智派の
人であるから、師の周辺には別源などの越前出身
者が多くいて、そうした知識は熟知していたと考
えられること。因みに雨華(うけ)・諸菩薩が大
法利を得る時、空中に曼陀羅華(美しい天華)の
降るをいふ(大漢和辞典) 雨華瑞・釈迦ありし時、
まだ(法華経)が説かれる前に、靈鷲山において
起こつたとされる六つのめでたい出来事(此十六
瑞)の三番目の瑞のこと。(織田仏教大辞典)
- (45) 傑翁録 贊仏事部
- (46) 傑翁録 住相州金宝山淨智禪寺語録の江湖疏
- (47) 諸宗勅号記 続群書類従第二十八輯下 釈家
部 四二二頁・四二三頁
- (48) 鎌倉時代の禪の主流 日本中世禅宗史 萩須
純道著 一三七頁
- (49) 延宝伝燈録 大日本仏教全書 延宝伝燈録第
一 二四九頁
- (50) 「寂円(中略)又開妙法寺、住職不久、構病而化」
延宝伝燈録 大日本仏教全書 一一八頁
- (51) 念大休禪師語録 大日本仏教全書 一八四頁
- (52) 前掲(47)に同じ 四二七頁
- (53) 前掲(1)に同じ